――目　次――

1　宿敵との結託は条件つき　002
2　決闘放棄　051
3　真昼の慣らし*　081
4　黒ヴォルタの渡河　117
5　決意は刻々と　133
6　宣戦布告 166
7　恐怖は足元から　188
8　ひとりぼっちの決闘　227
9　見返りはベッドの上*　240
10　エピローグ　294

※R18 シーンは章タイトル末尾に「*」をつけています。

※この作品はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

1　宿敵との結託は条件つき

今でもはっきりとスヴェンは思い出せる。

『その日』はおだやかな風が吹いていた。

ほほをくすぐる風はあたたかく、春の到来を感じさせる。謁見の間につながる柱廊の手前には広大な庭がある。ちょうど今そこで貴族たちが雉狩りに興じているのが見えた。

多くの猟犬に追いたてられ、雉が目をまわしながら逃げころぶ姿は哀れだった。それを見て貴族たちがげらげらと笑いたてる。

胸くそ悪い。

だが老王ヴィルフォールの『お気に入り』である自分がもの申せば、宮

廷にいらぬ紛争をまねくだろう。それは避けたかった。
（早く領土へ戻ろう……）
王城にのぼるのはこれで十五回目だが、訪れるたび息苦しさを感じる。
伯爵位をもらってからは特にひどい。
貴族からの嫉妬、羨望、媚びへつらい
とりわけ厄介な噂がひとつ。
老王の後継ぎはスヴェンではないかという流言だ。市井（しせい）は王太子ウェラードの存在を無視して、いまやスヴェンのことを『傭兵王』などと呼ぶ。
それもこれも十年前、隣国ピリカの『戦狂い（いくさぐる）』との戦いに勝ったせいだ。この勝利でスヴェンは爵位をたまわり、今では救国の英雄などと呼ばれている。

（――もしも今回の登城が王位継承に関するものなら、諌（いさ）めねば）
これ以上、無用な争いはさけたい。
「エリクソン伯爵。武器をお預けください」
いつのまにか謁見の間につづく大扉の前に来ていた。剣をつるしたまま王に会うのは不敬という習わしだ。それがたとえ救国の英雄であっても例外はない。
いつものように大扉のわきにひかえる騎士に、長剣をわたした。
ここは王城だ。剣が必要になる事態など万が一にもありえないが、この瞬間はいつも落ち着かない。
「では私はこれで」
いつもなら謁見の間までついてくるはずの近衛騎士に一礼された。
（人払いか……？）

老王と内密な話ならありえる。今までもにもあったが、その多くは小部屋だ。謁見の間では初めてだった。

謁見の間へ入ると、広間はしんと静まりかえっていた。

目をこらすと、遠い玉座に老王が座っているのが見えた。スヴェンは入り口の手前で一礼した。

「陛下。王命によりはせ参じました。スヴェン・エリクソンにございます」

数秒待ったが返事はない。

ふしぎに思い顔をあげたが、玉座には確かに老王が座っている。

（内密な話だから近くに寄れという意味か……？）

広間にスヴェンの足音だけがひびく。老王の顔がじょじょにはっきりと見えてくる。まぶたはとじていた。

眠っておられるのか。
めっきり体力が落ちたとよく語っていたし、老境にさしかかればよくあることだ。
が、それも玉座の手前にあるひな壇までのことだった。
老王の口元から白い泡がもれた。それはぶくぶくと泡立ち、よだれのように幾筋も垂れていく。王は手でぬぐいもしない。
いいや、もうぬぐえないのだ。
「陛下……？」
早くここから逃げろ。
戦場で培った直感がうったえてくる。
これ以上ここにいてはいけない。
俺だけではない。領土で暮らす団のみなにも良くないことが起きる

刹那、大扉が荒々しくひらかれた。
「やあ、スヴェンじゃないか」
王太子ウェラードだった。華やかな金髪にととのった顔は、まるでおとぎ話に出てくる王子さまだ。
つかつかと大股で歩み寄ってくる。
やめろ。来るな。来るんじゃない。
「今日、父上がきみと会うと聞いていたから、ぼくも参加しようと思っていたんだ。いいだろう？」
十年前、スヴェンがやってくるまでは目に入れても痛くないほど父王に可愛がられていた。
今日もまた、むじゃきな顔で近づいてくる。

ゴトンと、なにかが倒れる音が広間にひびきわたった。それはスヴェンの耳にやけに重たく響く。
振り返ると老王の身体が玉座から崩れおちていた。
「殿下、これは――っ」
抗弁しようとした瞬間、王太子の唇がわずかにつりあがるのが見えた。
背筋がこおる。
ウェラードは確かに笑っていた。
スヴェンの位置からでしか見えない位置に立ち、笑いながら追い詰めてくる。
（まさか……）
信じたくはなかった。
だが現に王は白い泡を吹いて、倒れている。その身体はうめきもしな

い。そこへ追討ちをかけるようにウェラードが叫ぶ。
「貴様、父上に何をした！」
「ちが……」
抗弁しようにもウェラードの背後からぞろぞろと騎士たちが入ってくる。まるでこの事件の証人になるかのように。
まずい、まずい、まずい。
武器は取り上げられた。謁見の間の構造を確認する。出入り口はあの大扉のみ。他に見知った通路はない。
「スヴェン殿、おぬし……なんてことを！」
ウェラードの背後に老将ピムレーが立つ。その目がぎょっと見開かれた。
「我が父を殺したというのか！　あれほどの大恩を受け取っておきな

がら」
なにを言っている。殺したのは貴様だろう。血のつながった実の息子でありながら！
騎士たちの悲嘆が一瞬で殺意にきりかわった。
「簒奪者め！」
「忘恩の徒が、恥を知れ！」
十年前ともに戦ったはずの仲間はもはや敵だ。
あっという間に剣と槍をかまえた騎士たちに取り囲まれる。磨きぬかれた刃が束となって襲いかかる。
雇い主をまもれなかった傭兵の末路は？
決まっている。
死だ。

視界に老王の死体が見えた。もはや王としての威厳はどこにもない。
おまえもあと少しでこうなる。
（――死んでたまるか！）
とっさに手をついて絨毯に転がった。すんでのところで槍をかわす。
転がった先に立っていた騎士のすねを蹴り上げ、槍を奪う。
すぐさま渾身の力で槍をふるった。騎士たちの足をぶったたく。
囲みが崩れた。
唯一の出口、大扉へと疾駆する。
「逃げられはしないぞ！　スヴェン・エリクソン」
ウェラードの声が追いかけてくる。
そんなことは分かっている。ここはもはや敵地。味方はいない。
十年前ともに戦った騎士たちはもう仲間ではない。

見知った顔が自分の姿を見ては仰天し、失望を向けてくる。
柱廊を走り抜け、槍をふるう。かつての仲間を押しのけるたび、胸が痛んだ。
誰かが痛みで叫ぶ声が聞こえるたび、申し訳なさで息がつまった。
まるで地獄だ。
これ以上ないほどの悪夢だった。相手に槍をふるうたび、自分の心にも傷ができていく。
逃げまわれば逃げまわるほど、敵は増えていった。なじみの顔が殺意にみちていく。
「西側の庭園に行ったぞ！　回り込め」
「もっと応援を呼べ！　奴を逃がすな」
もはや名前さえ呼んでくれない。

最低最悪の悪夢だ。

「はぁっ……はぁっ……」

気がついたときには、王城の西側に追いやられていた。広大な薔薇園の中央には王族のみが使うことを許された石造りの四阿(あずまや)が建っていた。あそこで老王と何度か話し合った。息子を頼むと言われ、できる限りのことをすると彼に約束した。

その結果がこれだ。どこで間違えた？　なにを失敗した？

四阿の先へ進むと、巨大な滝が見えた。

偉大なる神々の恵み――グラン・フォール。

耳をつんざくほどの轟音をたてながら、凄まじい水量が滝壺へと落ちていく。

ここからでも冷たい水しぶきが肌に降りそそぐ。小さな虹が大滝のあ

いだからいくつも生まれ、この世のものとは思えぬ絶景をつくり出していた。
足が重い。肩や二の腕は切り裂かれた痛みでひりつき、一張羅の服は無惨なありさまだった。
（生き延びなければ……）
生きて仲間達を来たる脅威に向けて、まもりぬく。
それが傭兵団の長としての意地と誇りだった。今やそれこそがスヴェンの身体を衝き動かしていた。
背後からせせら笑う声がかけられる。
「傭兵とはかくも意地汚いのか？　スヴェン・エリクソン」
振り返るとウェラードが大勢の騎士たちに囲まれて立っていた。悠然とした言葉とは裏腹に、美しい顔はいらだちで台無しだ。その顔が見ら

れただけでも胸がすっとした。
王殺しの濡れ衣など着せられてたまるか。
それにこの首を奴に与えてなるものか。
「ははっ、かもな」
ウェラードの言葉を笑い飛ばして、大滝に近づく。じりじりと包囲がせばまっていく。
このグラン・フォールと庭園のあいだに柵や塀はなかった。
――わしはな、こう思うのだ。スヴェン。この大いなる自然が織りなす滝に人の手でつくられたものなど似合わぬ――
老王の声が聞こえた。
もう二度と聞こえぬ声が。
「ふふ……」

あの日ともに語りあえた相手はいない。
今日、実の息子の手で殺された。
からんと音をたててにぎりしめていた槍が手からすべり落ちた。
あと一歩すすめばグラン・フォールに落ちて死ぬ。
だが万が一この命が残れば俺の勝ちだ。
『運ってぇのは賭けてこそ、価値が分かるもんだ』
戦場で昔そんな言葉を吐いた奴がいた。
誰だっただろう。血を流しすぎたせいか、うまく思い出せない。
ゆっくりと振り返った。水しぶきで滲む視界の向こうでウェラードが騎士たちに首をとれと命じるのが見えた。実に滑稽だ。
冤罪をかぶせた相手を自らの手で殺そうともしない。自分の手を汚さずしてなにが王位簒奪だ。

なにが王殺しだ。
恥を知れ。
すう、と大きく息を吸いこみ、怒鳴った。
「王となるのなら、みずから俺を殺してみせろ！」
聞こえずともよい。
ここで奴に叫ぶことにこそ価値があった。
騎士たちの手をかわし、グラン・フォールへと飛び込む。
死に方くらい自分で選ぶ。
それが傭兵の流儀だ。

◆
◆
◆

「あぁ、暇(ひま)だ」
防壁の石に頬杖をつきながら、デマヴァントはつぶやいた。
おおきなあくびもつけて、今度は石畳に大の字になって寝ころがる。
「殺しあいが足りねえ」
鍛え抜かれた巨体は今日も血を求めていた。
四方八方にはねた金茶の蓬髪は伸ばし放題、野趣あふれる男だった。
血湧き肉躍る戦いをこの一年一度もやっていない。
一度も、だ。
そのせいか女を抱いても、酒を飲んでもつまらない。
しまいには脳天かち割る本物の殺しあいを部下とやってみても、死体が増えるだけときた。どだい力の差がありすぎて勝負にならない。
「たりねえ、たりねえ、たりねえよ」

寝転がったままジタバタ足を揺らす姿は、もはや駄々をこねる子どもだ。
「大将、もう少し将軍としての威厳ってもんを出してくれ」
防壁の階段を登ってきた副官ヘルザにたしなめられた。
「威厳よりもオレは敵がほしい！　敵だ！　頭に血がかあっと昇ってきて、心臓を押しつぶすぐらいぞくぞくする強敵が！」
勢いあまってデマヴァントは天に向かって吠えた。
その姿はけだものだ
本国――ピリカで『戦狂い』と呼ばれるゆえんだ。
「たとえば？」
「スヴェン・エリクソンみたいな男とだ」
あいつはいい。実に愉しかった。

十年前の大侵攻で攻め上げた隣国カーラン王国に突如雇われた傭兵団長。

あぶらっけのない黒髪に冷たくこちらを見下ろす青い瞳。泰然とした顔の下に『修羅』を隠したあの男。

あれこそデマヴァントの好む『強敵』だ。

隣国カーランの王城を前に突撃した際、真っ向からデマヴァントに立ち向かい、その槍をさばききった男。さらにはこの腹に痺れるような一閃をふるってきた。ああいう奴こそ宿敵というのだ。

あの戦い以来デマヴァントの大のお気に入りはスヴェンだった。

彼をおいて他にいない。

「ほしいなぁ。あいつ。オレの部隊にいりゃ毎日殺しあいできるんだぞ？　最高じゃないか！」

「そう思ってるのはアンタだけですよ」
「いっそ奪いにいくか！」
名案を思いついたとばかりにデマヴァントは起き上がった。
「どこの国に強敵をさらうために敵地へ侵入する将軍がいるんです。二年前も国境待機の命令無視して奴の領土に入ったら、王のお付きで本命は国外に出てて不在！　そんでさっさと引き上げたでしょ。本国じゃ笑い話にもならなかったんですよ！」
「だってあいつが欲しかったんだもん」
「大将がかわいく言ったって気持ち悪いんですよ」
「ちぇ」
そこへ階段を駆け上がってくる音が複数、聞こえた。
デマヴァントの顔が喜色に包まれる。騒乱は大の好物だ。

「大将！　国境の向こうがわで煙が上がってる！　場所は大将の『お気に入り』の土地だ！」
一足飛びに防壁にはりついた。目をこらす。確かに黒煙がひと筋、雲間に棚引いていた。
スヴェンの領土は高い山に囲まれた隣国カーランの玄関口に当たる、防衛の要衝だ。
しかもその手前には国境である黒ヴォルタという大河が流れている。
簡単に攻めいれる場所ではない。
「よそが踏みこんだか？」
「違いますね。煙は川沿いじゃなく王城側からひろがってる。身内争いでも起きたとみるほうが妥当です」
副官ヘルザが持っていた望遠鏡を手渡してくる。

確かに彼の言うとおりだった。
どうします？　とヘルザに水を向けられる。
ふつうに考えてこれは好機だ。
上質な鉱石を産出する隣国カーランを本国は長年ねらってきた。十年前の大侵攻は失敗に終わったが、この黒煙は『傭兵王』と呼ばれるスヴェンの身になにか起きたということだ。
ふつうの将軍であれば武功をたてる最高のチャンスだと考えるだろう。
が――
「気が乗らねえ」
ぶあつい唇をひんまげて、デマヴァントは金茶色の蓬髪をぼりぼりとかいた。
本国からは戦闘狂だの獣（けだもの）だの呼ばれるデマヴァントだが、戦い方に

は一家言ある。
この十年、小国カーランを守り抜いてきた男の領土が味方に攻められているということは、自分の認めた強敵スヴェン・エリクソンはもうこの世にいないと見ていい。
彼が生きていれば、あの小さな領土に黒煙が上がることもなかっただろう。そんな暴挙を許すほどあの男は甘くない。十年前の戦いでデマヴァントがその身をもって体験している。
そしてデマヴァントが欲するのは強者との戦いだ。
スヴェン・エリクソンと戦えてこそ価値がある。
最初から楽しみの消えた戦いなどつまらなかった。
もはやふて寝して、酒をかっくらって寝るしかない。
フン、と大きな鼻息を鳴らし、もう一度石畳に寝転がろうとすると、も

うひとり兵士が駆け上がってきた。
「大将！」
「敵さんが内乱はじめたって話ならもう聞いたぞ」
「ちがいますよ！　カーランの人間が流れついてる！」
「そりゃ内輪もめが始まってりゃ死体のひとつやふたつ流れ……待て。ながれついた？」
黒煙はまだ国境の川辺にたどりついていない。死体が投げ込まれるにはまだ早い。
「きれいなべべ着てるわりに、こまかい傷が多くて妙なんですよ」
「ほぉ！」
デマヴァントの巨体がそわそわしだした。
なにかおもしろいことが始まる予感がする。

こうなるといてもたってもいられなくなる。そういう性分なのだ。
一足飛びに階段を駆け下りて、後を追おうとするヘルザを留まらせた。
「お前はそこで見張っとけ。オレは死体の検分にいってくる！」
「大将！　ちょっと！」
この退屈を吹き飛ばしてくれるなら死体でもよかった。
鳩が豆鉄砲をくらった顔で立ち止まっている部下を急かす。
「ほら、さっさといくぞ」
返事を待たずに駆けだした。

◆◆◆

川辺にはすでに人だかりができていた。

川べりは砦の外門を出てすぐの場所だ。暇な連中がわんさか集まっている。
「どけどけ」
邪魔なやつは後ろに放り投げて、デマヴァントは道を開けさせた。
伝令の言ったとおり川辺にはうつむいた男が地面に寝そべっていた。
あぶらっけのない黒髪はぐっしょりと濡れ、一張羅の黒服は水を含んでだぼついていた。
溺死体に見える。
だが溺死しているなら手の甲は赤子のようにぱんぱんとふくらむし、身体から異臭を放つものだ。それがまだない。
死んでまもないのか？
「大将、上流から落ちたんですかね？」

部下の問いを無視して、うつむいた男の顔を足で動かした。
横顔が見えた。
十年前に決闘した強敵とつながる。
「ッ」
デマヴァントはしゃがみこみ、濡れた前髪をかきあげた。
まちがいない。
スヴェン・エリクソンだ。
脈がない。
あお向けに寝かせて気道を確保した。濡れた唇に目いっぱい吸いこんだ空気を送りこむ。
一回目、無反応。
二回目、無反応。

三回目――

「……かはっ……ッ」

「おうおうおう、全部吐きだせ。出しちまえ」

身体を起こしてやると、青い瞳がしばたいた。

あの決闘以来の邂逅。

デマヴァントの胸に熱いものがこみ上げる。

しかしスヴェンの瞳はふたたび閉じてしまった。

すぅすぅと想像以上に静かな寝息が聞こえる。

かつて強烈な命のやり取りをした宿敵の姿を見て驚いたか、あるいは人肌に安堵したのか。

どっちだっていい。

俺の腕のなかで奴が安心しているという事実こそ重要だった。

「〜〜ッ！」
デマヴァントはスヴェンの身体を横抱きにして持ちあげた。
「大将、そいつ、どうするんです？」
「敵に引き渡すんですか」
野郎どもが興味津々に聞いてくる。
誰が見たってこいつは敵国の人間だ。
使い道は人質くらいだ。
デマヴァントはニンマリと笑って宣言した。
「オレのモンにする！」
あっけにとられた部下を置き去りに、浮かれ気分で来た道を戻る。
成人男性ひとり分の重みなどデマヴァントの怪力なら楽勝だ。
まずは砦に常駐している治癒士にこいつを見せて、回復したら条件を

出してやろう。
どんな顔を浮かべるか見ものだ。
くわえてこいつの領土が攻め立てられていることを教えれば、絶対にこいつは反撃に出る。かつて子飼いの部下を追い詰めたとき、地の利もかなぐり捨てて部下を救出しようと突撃してきた男だ。
領土のあの惨状を見れば、絶対助けに行くと言うに決まっている。
そうなればそこにデマヴァントの欲する『戦い』がある。
「くくっ、はははは！」
次から次へと笑いがあふれてとまらない。
とびっきりのイタズラを思いついたクソガキのごとく、デマヴァントは笑いつづけた。

◆◆◆

スヴェンは見知らぬ部屋で目をさました。ゆっくり体を起こすと肩や腹、足にきちんと手当てが施されていた。

医術の心得がある者の包帯の巻き方だ。

いったい誰が……？

ふしぎに思った瞬間、大いびきがすぐ近くから聞こえてきた。

「……は？」

特注のベッドに大の字で眠りこける巨漢。おさまりのわるい金茶色の蓬髪、小指の欠けた左手でぽりぽりと胸をかく男。

忘れもしない隣国ピリカの『戦狂い』デマヴァントだった。

なぜこいつが隣で寝ている？

今も両国は緊張関係にある。それにこいつとは決して同衾するような仲ではない。
むしろ首を取りあった宿敵だった。
「うぅン」
長い手が伸びて抱き寄せられる。顔に分厚い胸板を押しつけられる。
あろうことかこの宿敵は半裸で寝ていた。
「ッ、おい……！」
抗議すると腰にまわった手が尻をつかんだ。
「……かわいがってやるから、あばれるなよ。子猫ちゃん」
女にまちがわれている。
屈辱だ。
確かにデマヴァントの巨体と比べたら自分は小柄だが、れっきとした

男だ。
同性にケツを揉まれる趣味もなければ、女扱いされる言われもない。
「おい、起きろ」
「んん〜……ちゅぱっ」
後頭部を押さえつけられ、唇をうばわれた。勝手に太い肉厚な舌が入りこみ、かわいた粘膜にだ液を塗りつけられ、舌をひっぱられる。
ちゅ♡ちゅ♡ちゅぅぅうう♡♡
もがけばもがくほど頭を押さえつけられ、舌が絡み合う。尻を揉む手はさらに大胆になり、股間にまで入り込もうとする。
（この――ケダモノがっ！）
もみあげをひと房、容赦なく引き抜いた。
「あいてッ？！」

やっと起きたデマヴァントのでこに頭突きをくらわした。涙目の大男をつめたく見おろす。
「やっと起きたか。野獣が」
デマヴァントは目をしばたいていたが、焦点が合うと途端に満面の笑みで飛びついてきた。
「やっぱり夢じゃなかったなぁ！　ははは、スヴェン。スヴェン・エリクソンだ！　オレの手のなかにいる！」
無精ヒゲのはえた顔で頬ずりされて、ちくちくする。反射的にグーで殴ってしまったが、それすら奴にはご褒美らしく、さらに密着された。
「……いい加減にしろ！」
額に手をかけて引き離そうとするが、本調子ではない身体では無理だった。

滝に飛びこんで血を失い過ぎたか、あるいは眠っていた時間が長かったのか、筋肉のおとろえを感じる。
「ここはどこだ！　なぜ貴様と同衾している」
「同衾……いいな。その言葉。あんたの口から出たかと思うと興奮する」
「どこがだ！　それといい加減、尻を揉むのをやめろ！　貴様は男を抱く趣味でもあるのか」
そういう輩が好むのは大抵、少年だ。スヴェンはとっくに成人もすませ、むさ苦しい三十路の男だ。顔だちだって精悍とは言われても、整っていると言われたことはない。
デマヴァントはいかめしい顔で考えこむ。
「確かにオレも抱くならボインな姉ちゃんが好きだ。手のひらから溢れ

る位ふわっふわなおっぱい持ちあげるのが最高だ。――が」
一旦、言葉を切ると、
「俺が認めた男をベッドで啼かすのは、もっと最高だ」
目をキラキラと輝かせてまで言うセリフか。
こんな男が十年前の大侵攻で散々悩ませられた宿敵だなんて、信じたくない。
どっと疲れがこみ上げてくる。
もはやあきらめの境地だ。抵抗する気も失せる。
「では私はお前の捕虜ということか……」
ここは敵地だ。
貪婪（どんらん）の国と呼ばれるピリカの侵攻を武力で支えてきたデマヴァントは、今や国内で軍神とさえ称えられていると聞く。

まさか国境沿いの砦に彼がいるとは思わなかったが。
脳裏に王城で起きた出来事がよみがえる。
王殺しの汚名をかぶせられ、かつてともに戦った仲間たちから刃を向けられた悪夢のような時間。
領土で暮らす部下たちを守りにいこうにも、敵地に囚われの身となっては至難の技だ。
暗澹(あんたん)とした思いにとらわれる。
「……おい、抱く気が失せる顔すんな」
「はっ、貴様に抱かれずにすむのなら私は大歓迎だな」
どうせ何もかも奪われたのだ。守るべき主を守れず、部下たちを助けにもいけない。
投げやりな気持ちになって、なにが悪い。

たがだか十年前、一騎打ちしただけの男に文句を言われる筋合いはなかった。
すると後頭部をつかまれ、鼻先がくっつくほど顔を近づけられる。
くろぐろとした瞳がまっすぐに自分を見つめてくる。
「オレが抱きたいのは、あの時オレの刃を真っ向から受けて剣が折れても挑んできたお前だ。正面から敵をねじ伏せ、骨をくだき、首をとる。オレの、オレだけの宿敵だ。そんなみじめったらしいツラ見せてる男じゃねえ」
「――貴様に何がわかる！」
こんな状況に追いやっておきながら、もう一度奮起しろとでも？
寝言は寝てから言え。
恩人は殺された。

冤罪をかぶせた王太子はきっともう領土を焼いている。守るべきものを守ろうにも、捕虜の身では……。

「言っておくがオレはお前を捕虜にしたなんて一度たりとも言ってねえぞ。分かるか。目が覚めてからただの一度もだ」

記憶をまさぐる。

確かに彼は『抱きたい』などとほざいてはいたが、捕虜という言葉はひと言も発していなかった。

デマヴァントが話を続ける。

「大河の上流からあんたは流れてきた。あんたの領土は一週間以上前から黒煙がたなびいてるが、まだ落ちてはいない」

「……なんだと……？」

王城からの距離と領土の広さを考えても、領主不在の状況からみても

最早陥落していると考えるのが自然だ。
それがまだ落ちていない？
デマヴァントがにんまりと笑う。
「なぜかって？　それはオレが支援してるから～」
「は？」
この男は敵だ。敵のはずだ。
エリクソン領が襲われているのを見れば、その混乱に乗じて領土を奪っていてもおかしくない。
なのに、そうしていない？
宿敵の領地を支援するなど手間と時間と金がかかるだけ。一銭の価値もない。
「それはピリカの王命か……？」

貪婪の国と呼ばれるだけあって、今代の王は他国の侵略に意欲的だ。今はカーランとは反対の南を攻めているが、いつその矛先がこちらに向かってきてもおかしくない。

なのになぜ。

「まさか。オレの独断」

困惑が生まれる。

「なぜそんなことを？」

「だってそしたらお前に恩が売れるだろ？　そしたらオレはお前を抱けて、あの血湧き肉躍る殺し合いも申し込める。一石二鳥じゃねえか」

こいつはなにを言っているんだ？

頭の理解が追いつかない。

「……つまり、私と殺し合いをしたいから助ける、と？」

「殺し合いだけじゃねえよ。セックスも込みだ」
どさくさまぎれに尻を揉みしだかれた。
容赦なく手をたたき落とす。
「殺し合いだけでいいだろうっ」
男に抱かれるなどごめんだ。ましてや相手がデマヴァントなど、冗談ではない。
「い・や・で・す〜。抱いて、負かすのがオレの流儀だ。抱かせてくれないなら、オレの兵も物資も引かせるぜ？」
これではもはや脅迫だ。
だが背に腹はかえられない。まだ領土で戦っている仲間を救う方法があるというのなら、今はこいつの条件を呑むしかない。
コイツに抱かれるなど想像するだけで吐き気をもよおしたくなるほど

気色悪いが、みなの命を守れるのなら、安い買い物だ。
スヴェンは長いこと考えこんでから、口をひらいた。
「分かった。抱かせてやるし、殺し合いもしてやるが、勝つのは私だ」
「そいつはどうかな」
デマヴァントが不敵な笑みを見せた。

◆◆◆

時はさかのぼって、数日前。
「まだ死体は見つからないのか」
王太子ウェラードは騎士を問いつめた。
「申し訳ございません！　上流はなにぶん水の流れが早く、グラン・フ

ォールから先の国境は山間（やまあい）のため捜索の手が足りず……」

ここで騎士らを叱責するのは簡単だった。

だが自分はこれから王となる人間だ。安易に部下を懲らしめていては今後の障害となる。

なによりも……。

『奴』がグラン・フォールへ落ちる直前に叫んだ言葉が頭から離れなかった。

『王となるのなら、みずから俺を殺してみせろ』

みずから。

その言葉にウェラードの心はゆさぶられた。

傷口に塩を塗りこむような強烈な発言だった。
父を毒殺した後ろめたさがこれで完全に消し去ることができなくなってしまった。
まるで呪いだ。
解くには奴を己の手で殺すしかない。
執務室の大机に置かれた地図を破けるほど握りしめた。
「殿下、心苦しいでしょうが、エリクソン領の焼き討ちは我らに任せ、先に戴冠の儀を進めてはいかがでしょう？」
騎士たちは、かつて信頼の厚かった傭兵がこのような暴挙に出たことで王太子が心を痛めていると思ったらしかった。
「……そう、だな」
奴から贈られた呪いの言葉は当分、消えそうにない。

貴公子然とした苦笑を浮かべる。
執務室に現状報告を届けてくれた騎士にねぎらいの言葉を贈ろうとした瞬間、勢いよく扉が開け放たれた。
「伝令！　伝令！　エリクソン領に侵入者あり！　侵入した者はいずれも隣国ピリカの兵装をまとっていると報告あり」
執務室に激震が走った。
さらに伝令の言葉は続く。
「かの侵入者は我が騎士隊のみを攻撃しており、エリクソン領の者は傷つけておらず！　これは……」
そこで伝令は言い淀んだ。無理もない。
次に伝える言葉で部屋の空気が変わる。それこそ王国の未来を変えてしまうような内容だと肌で感じたからか。

ごくりと生唾を飲みこむ。
みな固唾を飲んで伝令を見守った。
「スヴェン・エリクソン殿に謀反の疑いあり……かと……」
蚊の鳴くような声がさざ波のごとく部屋に浸透していった。
老王随一のお気に入りと呼ばれ、十年前の戦いで救国の英雄となった男が反旗をひるがえした。
その事実は部屋に居並ぶ騎士たちに、そしてウェラードにも衝撃を与えた。
（みずから殺してみせろと言った代わりがこれか……？）
部屋に充満した空気は文字どおりうねり、淀み、ひとつの方向へと凝縮していった。
すなわち。

スヴェン・エリクソンは初めから反逆者であった、と。
十年にわたる恩義が憎悪へ切り替わる音をウェラードは確かに聞いた。
かちりと時計の針が進んだ気がした。もう元には戻せない。
「王都に触れを出せ。あの男は十年かけて我々を騙し、隣国と通じていたと。その首を持ち帰った者には多額の報奨金を取らせる」
そこでウェラードは言葉を切った。
深く息を吸いこみ、部屋にいるもの全員に聞こえるよう宣言する。
「これより逆賊スヴェンに与えた領土を我らの手に取り戻す！」
耳をつんざくほどの歓声が執務室を満たした。
熱狂にも似た怒りと憎悪が騎士たちの喉からほとばしる。
ウェラードは熱を帯びた眼差しで地図に描かれたエリクソン領を見つめた。

山脈に囲まれた王国にとって唯一の玄関口。貿易の要衝であり、代々の王族が領主となって治めてきた歴史ある大地。

それを救国の英雄だからと、よそ者に与えた父の凶行にどれほど振り回されてきたか。

お前は何も分かっていない。この土地の大切さを……。

目をつむれば、大滝の前で満身創痍のまま叫ぶスヴェンの姿が浮かんだ。

（ぼくに覚悟を問いておきながら、貴様はこれか？）

ウェラードは怨念に彩られた瞳で、男たちの歓声を聞きいった。今までに学んだ知恵と策略の全てを使って、貴様もその仲間もこの世から消してやる。

2　決闘放棄

三日、待て。

それがデマヴァントの出した条件だった。自領に早く戻りたかったが、何事にも準備がいる。

国境の黒ヴォルタ川は大河だ。渡河にも準備がいる。この時期は雪どけ水で川の水かさが増しており、慎重にいかねば自領へ着く前に溺死する。

二度も水に落ちるのはごめんだ。

そんななか、スヴェンはデマヴァントの『客』としてもてなされる事になった。

この砦で『客』となること、すなわち――

「あんた十年前、大将と一騎打ちして生き残ったんだってな！　俺と戦ってくれ！」

「いやおれとだろ？　おれがこの人見つけたんだから」

「おめーはさっき殺しあいしたばっかだろう」

奴の仲間たちの決闘相手にさせられることだった。

しかも取り囲む男どもの手には、切り立ての耳が握られていた。要は相手を殺した勝利の証だ。

ある者は細紐にいくつも耳を通してブレスレットのように見せびらかしている。

カーランにはない風習だ。

一言でいえば野蛮。

だがそれで片付けるのは早計だった。
なぜならこの猛り狂った連中こそ隣国の切り札なのだ。祖国に幾度となく勝利をもたらし、周辺諸国からは長年恐れられ続けている。
戦狂いのデマヴァント。
彼に率いられた軍団は文字どおり敵を喰いちらかすまで戦うことをやめない。狂戦士の集まりだ。
王命すら無視して戦いつづけたケースは枚挙に暇がない。
そんな獣のすみかに『客』として招かれればこうなるのは目に見えていた。
「私は不要な戦いはしない」
傭兵にとって肉体は金を稼ぐ資本だ。
鍛錬はすれど体を損なう殺しあいなど言語道断だ。

「殺しあうのはデマヴァントとだけだ」
しっしっと手で追い払う。
「でも大将がいいって言ってたぜ」
「そうそう。オレとだけやるのはもったいねえ、お前らも殺しあっとけ！　つってたよな？」
三十路近い猛者たちが神妙な顔で頷きあう。
スヴェンはこめかみに手を当てた。
（あの……戦ばか！）
自国の王命すら無視する戦狂いと聞いてはいたが、交わす条件ぐらいもう少しまともに作れないのか。
こうなると十年前の大侵攻で一度だけ彼が見せた男ぶりも幻に見えてくる。老将ピムレーが画策した谷間での岩落とし。味方の大半をお互い

削り取られた壮絶な戦いの末、奴はこういった。
『運ってぇのは賭けてこそ、価値が分かるもんだ』
疲弊しきっていても勝利をあきらめぬ執念に兵を率いる猛将の底力を見た。
今やあの姿が嘘のように思えてくる。
「はぁ……」
このままでは広場にいる全員が群がってきそうだ。せっかく回復した体調がまた悪化しかねない。
どうするか。
悩んでいたところへ、険のある声が投げかけられた。
「お前、大将に勝ったってのは嘘だから戦いたくないのか」
人垣を割って現れたのは成人したての小柄な青年だった。ぼさぼさの

金髪に目つきの悪さは一級品だ。
こういう手合いは傭兵団を率いていた頃にもよく見た。尊敬する男に心酔しきっているタイプだ。
「……誰だ」
「ディマ」
猛者たちが彼に一目置いているのは、目つきでわかった。耳輪を見せびらかしていた連中が一斉に彼のために道をあける。年下だからという侮りはなかった。
この青年を見かけだけで判断したら痛い目を見る。
傭兵としての勘だった。
「ではディマ。私が奴に勝ったというのが――」
とん、と首に硬いものが当たる。

ナイフの柄だった。
ちらりと視線を伸ばすと、抜き身の刃を二本の指ではさんでいる。
中天に達した太陽の光を受けて、銀色の刃がギラギラと輝いている。
ディマが手首を返せば一瞬でこの首ははねられるだろう。
、、
「大将だ。『奴』じゃない。ここはお前が治める領地じゃない。言葉には気をつけろ」
昼時のせいか、ディマの深緑の瞳が獲物に餓えた狼のように見えた。
デマヴァントがスヴェンを『客』としてもてなしているのが気にくわない。
『客』の領土を守らされていることにも腹をたてている。
何よりも青年を不機嫌にさせているのは、デマヴァントを敗北させた男がこの世にまだ生きているという事実。

小さな身体から、陽炎のように嫉妬と苛立ちがたちのぼるのが見えた。
スヴェンは腰を下ろしていた階段からゆっくりと立ち上がる。
突きつけられたナイフなど無視して。
「――では、どうしたら信じてもらえる？」
「戦え。俺たちにお前が大将よりも強いと証明してみせろ。十年前、大将の仲間のほとんどがお前に殺された。だからお前が大将より強いと証明できる人間はほとんどいない」
ディマのまっすぐな言葉に鋼の心臓がじくりと痛んだ。
「俺は自分の目で見たものしか信じない。目で見ることこそ証だ。俺の目にお前が最強であることを見せろ」
見上げてくる瞳はいっそ無邪気ですらあった。純粋に強さだけを追い求める瞳はスヴェンにも覚えがあった。

ここで退いたら傭兵の名折れだろう。
おあつらえ向きに、目の前には四方を壁で囲まれた広場がある。戦うにはもってこいだ。
「……いいだろう」
こたえた瞬間、あたりは男どもの野太い歓声で沸きかえった。

◆◆◆

「武器は？」
「これでいい」
握った長剣を試しに振ってみる。悪くない。なにより重さがちょうどいい。

人によっては使いなれた武器に執着するのだろうが、スヴェンは違う。戦場で混戦状態となったとき、他人の武器を拝借したことは何度もあった。

広場はもはやお祭り状態だ。

酒をかっくらう者、踊り狂う者、殺せぇ！　と物騒なセリフを吐く者が二人を取り囲み、人垣を作っていた。

ディマを倒さぬかぎり彼らはこの人垣をとかないだろう。あわよくば自分もと狙っているのは顔を見れば分かる。

本当に厄介なところへ来たものだ。

だがあの宮廷よりは増しに思える。ここは妬みも苛立ちもみんな顔に出す。あけっぴろげだ。

それは懐かしき我が故郷……戦場を思い出させた。

「ふふっ」
つい笑みがこぼれた。
「なにがおかしい？」
「いや、ここはいい所だと思ってな」
褒め言葉のつもりだったが、ディマの反応は違った。
その小さな身体から、はち切れんばかりの殺意が放たれる。
馬鹿にされたと思ったのかもしれない。
目が雄弁に語っていた。
謝罪しようと口をひらいた瞬間、ディマが両手にナイフを構えた。
「宣誓師！　口上を述べろ！」
決闘は宣誓がなければ始まらない。奴と戦った時もいた。彼らの崇める戦の神――雷神にこれが神聖なる戦いだと申し立てるのだ。

酒樽を抱きしめた男が人垣から出てきて片手を挙げた。
「ひっく。……ではここに客人スヴェン・エリクソンと我が第一部隊長ディマの殺しあいを雷神トーラムに申し立てる。始め！」
第一部隊長。
これは難敵だ。
デマヴァントの腹心とも呼べる地位だ。
十年前に戦った部下も猛者揃いだった。デマヴァントを狂信し、大いに猛り、勇ましく死ぬことこそ誉(ほま)れと考えた死戦士たち。
その狂奔ぶりにどれほど苦しめられたことか。
これは侮れない。
長剣を握りなおした。
「やっと増しな顔をしたな。お前」

気づいた時にはゾッとするほど近くにディマの顔が来ていた。
驚くべきスピード。
不気味な音を立てて左右からナイフが迫る。
「ッ」
一撃必殺。
即座にしゃがみ、かわしきる。頭上のほんの少し先でナイフのかち合う音が響いた。
ぞわりと背筋に冷たいものが走る。
常人ならとっくに首が胴体から切り離されていた。
ディマの初撃は空振りに終わる。盛大な舌打ちが聞こえた。
（舌打ちをつきたいのはこっちだ……！）
いま彼は完全に自分を殺すつもりで来ていた。

となればスヴェンに残された方法は一つ。
彼を完膚なきまでに叩きのめすしかない。だが相手は第一部隊長だ。
言うなればデマヴァントの一番槍だ。
持っている武器は互いに真剣。
叩きのめすのなら命を奪う覚悟でやるしかない。
だが彼を殺せば今後の戦いに影響が出ることは必至。客人の身でありながら同盟相手の一番槍を殺せば、この場にいる連中に半殺しにされかねない。
そもそもデマヴァントはなぜ連中をとめない？
部下じゃないのか？
あまりにデマヴァントが非常識なせいで、普段なら妙案と呼べるものがすべて下策に見えてくる。

なによりも『客』である自分がなぜここまで奴に心を砕く必要がある？
目覚めてからずっと身体にしがらみがまとわりついている感触があった。
王太子から与えられた冤罪という名の悪意。
デマヴァントの身勝手にもほどがある条件。
そしてディマの一方的な嫉妬と憎悪。
そのどれもがスヴェンには身に覚えのないものだ。
勝手に憎み、勝手に押しつけ、勝手に妬む。
ふざけるな。
俺が何をした。
腹の底からふつふつと怒りが燃えたぎる。血管を通して全身に駆け巡る。

我慢ならないとは正にこのことだ。
いいだろう。終わらせてやる。
相手が奴の一番槍でも知ったことか。
因縁をつけてきたのはあちらだ。
ならばその因縁がはじき返されることもあると知るべきだ。
スヴェンはもう悠長に戦う気などなれなかった。
一瞬でディマとの間合いをつめ、長剣を振りおろす。
「ははっ、やっと本性を見せたな！　傭兵野郎」
両手に構えたナイフで受けとめられた。が、こいつの武器は俊敏さにある。
その速度を支えるものは、第一に足。
容赦なく足の甲を踏みつけた。全体重をかける。足の骨が折れるかも

しれない。
だが、それがなんだ？
これは『殺し合い』なのだから。
「がっ……！　ァ……ッ！？」
「言い忘れたが私はデマヴァントが嫌いだ。大嫌いだ。できることなら、この世で一番手を借りたくない。そういう相手だ。分かるか？」
そんな男にこの身を捧げるなんて、悪魔の契約を交わすことになった怒りが。
両腕にさらに力をこめた。
ディマの身体が地面に沈む。
「お前が奴に心酔していようと、関係ない。私も奴の仲間を殺した。だが私も奴に嫌というほど仲間を殺された」

それは団の仲間だけではない。
あの当時、王国で知り合った騎士団の仲間たち。最初は反目していたが、戦いを通じて気を許した連中はみな、奴に殺された。
所属は違えど戦友であり仲間だった。耳を引きちぎられた亡骸は今も峡谷の土に埋もれたままだ。
思いだすだけで、胸が痛む。だがこの痛みは決して手放してはならない。
私の、いいや俺だけのものだ。
もし手放してしまったら、誰が彼らの無念を覚えてやれるというのだ。
だからここで死ぬわけにはいかない。
「んなこと俺が知るかよっ！」
驚異的な力で腕を押し戻される。

まずい。
一旦離れて距離をとろうとするも、ディマは食らいついてきた。二振りのナイフが猛攻を再開する。
前後左右かわるがわる襲いかかり、スヴェンの頬や腕を切りつけた。
蹴りも加わり、周囲の声援もディマに味方する。
あぁ、全くもってディマの言葉は正しい。
そうだ。
救国の英雄、傭兵王などともてはやされても、所詮中身は人殺しだ。
行き着くところは常に仲間を殺した殺された、だ。互いに憎悪をかけあって、それがどうした！　俺はもっと強い憎しみを持っているぞと獣のように誇示しあう。
どんなに無欲であろうとも、動物であることから人は逃れられない。

（ならば証明しよう――）
脇腹に蹴りを受けた。襲いかかるナイフを左腕で受ける。ぐっと腕に力をこめれば、ナイフはもう抜けない。
これで一本。
「ッ！」
ぎょっとするディマの身体を広場に押し倒した。膝に体重をかけ、逃げ道をふさぐ。最後のナイフは長剣の平でたたき落とした。
ディマは泣き叫んだりしなかった。
「……殺すなら殺せ！」
ディマの左胸に切っ先を突きつける。
童顔は異様なほど赤らみ、爛々と目を輝かせる。歯をきつく食いしばり、来たる死に備える。

なるほど。
これがディマの考える戦士としての死に顔か。戦って死ぬことこそ最上だと考えている。
弱冠十八の小僧にこんな顔を浮かべさせるデマヴァントにも、己にも腹がたった。
スヴェンは声の限り叫んだ。
「見ているんだろう、デマヴァント！」
答えはない。
だが奴がこんなおもしろいことを見逃すはずがない。
大の戦狂いだ。
絶対に見ているという確信があった。
「このしょうもない戦いをまだ続けさせるつもりか！」

しょうもない、と言った瞬間ディマの目がギラリと光った。
ハッ、と頭上の防壁から吐き捨てるような笑い声が聞こえた。
デマヴァントだった。
「しょうもないとはひどい言い草だな。これが俺たちの儀式だ。スヴェン・エリクソン」
儀式。
こんな殺しあいを崇高だというのか？
デマヴァントの物言いでもう一つはっきりしたことがあった。
奴はディマが負けても、つまり彼がこの儀式で死んでもいいと考えている。
第一部隊長という地位を与えているくせに。その地位に見合う力を彼は十八の幼さで手に入れているというのに。

こういう男だと分かっていた。分かっていたからこそ腹が立つ。
「おい」
今日はじめて自分からディマに声をかけた。細い手首を掴み、その指に自分の長剣を握らせた。絶対に落とさぬよう、自分の指で包む。
「……は……？」
ディマの顔に混乱の色が浮かんだ。
「心臓の位置は分かるな」
切っ先をぴたりと左胸にあてがう。
周囲の野次や歓声は潮が引くようにやんでいた。
「……おいやめろ……なにやってる……おまえ、正気かっ」
ディマが必死に剣を外そうともがく。
「どんな心臓もゆっくり刺すと最初は逃げる。ひと息に突け」

「ふざけるな、お前が勝ったんだぞ！　俺を殺せよ！　俺が負けたんだぞ！」
ディマの悲痛な叫びが広場に響きわたった。
怒りと混乱で興奮した童顔をじっと見つめる。
目をそらすことなど許さない。
ぐっと体重をかけた。切っ先が心臓のある皮膚につぷりと入っていく。
「私はデマヴァントの『客』であってお前の仲間じゃない。お前たちの殺しあいにつき合うのは、もううんざりだ」
こんなケダモノじみた命の使いかたは認めない。
使うなら私の命を使え。
脳裏に今まで知り合った人々の死にゆく光景がいくつも浮かんだ。
戦友、少年兵、腐れ縁たち、そして玉座から崩れ落ちる老王。

もうたくさんだ。ここで終わりにさせろ。
次の瞬間、勢いよく肩をつかまれた。切っ先が心臓から離れていく。
デマヴァントだった。
防壁から駆け下りてきたのか、額に玉のような汗が浮かんでいる。
「……はぁ、はぁ……てめぇ。……オレとの契約を勝手に切るんじゃねえよ」
本気で焦っている顔だった。
十年前の戦いで見たからよく覚えている。
「先に放棄したのは貴様だろう。私は領地を救うため、貴様とだけ殺しあいをする。殺しあいに貴様の部下をつけ加えられた覚えはない」
「〜〜ッ。そりゃそうだけどよ」
根が五歳児なのだ。

部下が戦うのも自分が戦うのも好きな男だ。どちらか選ばされたことなど、今まで一度もなかったのだろう。
顔をしわくちゃにして悩む姿は、大好きなオモチャを取り上げられて嘆く子どもと同じだ。
道理で王命も無視するはずだ。
だが私と結託するからには、無視などさせない。
「――選べ」
両方などと甘えたことを抜かすなら、今度こそディマに私の心臓を貫かせるつもりだった。
デマヴァントは長いこと地鳴りのようにウンウン唸ってから、ギョッとするほど近くに顔を寄せて、宣言した。
「殺しあいをするのはオレとお前！　これでいいか」

そのあまりの慌てぶりにスヴェンの緊張もほどけた。
つい笑みがこぼれる。
「あぁ、それでいい」
長剣を鞘にしまい、起き上がる。ディマは悄然としていた。
左腕に刺さったままのナイフを引き抜く。刺しどころがよかったらしい。血管を傷つけずに済んだ。わずかに傷口から血が滲んだだけだった。
たった少し前まで殺しあっていたディマに手をのばす。
「立てるか？」
「……、」
ふくれっ面のディマの腕や肩を軽くたたいて、念のためケガがないか確認する。
五体満足だ。

「よかった」
ぼさぼさの髪を手ですいてやる。こうして日の当たるところで見ると、デマヴァントの金茶色の髪に色合いがよく似ていた。
もしかしたら親戚だろうか。
尋ねてみようとした瞬間、背後から抱きつかれた。
「……デマヴァント……？」
自分よりひと回りも大きい男に抱きつかれる趣味はない。腹のあたりでがっちりと組まれた腕は手錠のように硬かった。
「おい、離れろ」
ぐるん、と音がするほど大きく顔を上げて、デマヴァントがぼそりと呟いた。
「オレとだけ殺しあいするってことは、オレとだけセックスするってこ

とだよな？」
「は？」
自分でも信じられないほど冷たい声が出た。
何を言っているんだ。このばかは。
「いや俺も予定ではあっちに渡ってからお前を抱こうと思ってたんだけどよ。たった今勃っちまったから、今から抱いてもいいよな」
良くない。まったくもって良くない。
というか腰に当たってる硬いモノをさっさとどけろ。くっつけるな。気持ちわるい。
思いっきり首を左右にふって拒否するが、無視された。
「よし！　慣らしをするなら早いに越したことないよな」
勝手に肩へ担ぎあげられる。

「ふざけるな。おい人の話を聞け！」
力任せにデマヴァントの背中を叩くが、効果はない。ずんずんと広場から大股で去ろうとする。
デマヴァントの部下たちがぽかんとした顔でこちらを見ていた。
「くそったれ！」
スヴェンの叫びが広場にむなしく響いた。

3　真昼の慣らし

寝室に入るなり、ベッドに放り投げられた。
「っ、貴様……いいかげんに」
すぐ起き上がろうとすれば、のしかかられた。
窓からは午後の日差しが照りつける。
真っ昼間だ。
そういう『事』に及ぶ時間ではまったくない。ましてや男同士。勃つモノだって勃ちはしない。
そう思っていた。
「じゃあ早速いただきます」

いそいそとデマヴァントがベルトを引き抜いて、ズボンを下着ごと引きずり下ろした。
ボロン、とそれはもう見事なサイズのムスコが姿を現した。完全に勃起している。日の光に照らされた竿からは透明な液体がしたたり落ち、スヴェンのズボンにシミを作った。
「っ……」
後ろへ下がるがその先は枕元だ。逃げ道はない。
なにか武器になるものがないか探すうちに身体をベッドに押さえつけられた。四つんばいになったデマヴァントの股間からぶらん、と凶悪なモノが揺れている。
「つかまえた」
どんどんデマヴァントのむさ苦しい顔が近づいてくる。

これが十年前の決闘なら喜んで相手しただろう。
だがここは奴の寝室だ。しかも今は草木も眠る真夜中ではなく、真っ昼間だ。奴の部下たちは今も起きていて、この部屋を通りがかることだってある。
声なんか聞かせてたまるか。
きつく唇を閉じる。
と、デマヴァントは無精髭の目立つ口から長い舌を伸ばして、上唇をなめてきた。
「ッ！」
背筋がゾワゾワする。
舌は一回舐めるだけでは満足しなかった。
二回、三回と固く結ばれた上唇の感触を楽しむように何度も舐めてき

た。
まるで犬のように。
汗で濡れた黒髪をやけに優しい手つきでかき上げられた。
そして逃げ場のない身体に勃起した竿を押し付けてくる。上着をたくしあげ、へその穴にじかに濡れた亀頭をくっつけた。
「――ッ」
口をひらけば奴の舌が待ち構えている。決して奴と目を合わさぬよう顔をそらすが、舌は離れてくれない。
「イイなぁ。さっきまで俺にどちらか選べと命じてきた男がオレの下で子猫みたいにぷるぷる震えてるのを見るのは」
挑発だ。乗るな。
「部下の前でオレに言うことを聞かせたんだ。なら貰えるものは貰わな

いと。そうだろ？　相棒」
最後の言葉にギョッとした。
宿敵ならまだ分かる。だが相棒？　こんな男を相棒にする気など毛頭なかった。
相棒と呼べる男は昔からただ一人。
「私が背中を預けると決めた男はあいつだけだ」
副団長のビョルン。
きっと今も領地で仲間を率い戦い続けている幼なじみ。
彼をおいて他にいない。
だがデマヴァントには予想外の答えだったらしい。
「オレじゃないわけか……」
特徴的な鷲鼻を不満げにひくつかせて、顎に生えた無精髭をなでる。

「ま、いいや。口ひらいてくれたから、もらうな」
突如、深く唇を奪われた。肉厚な舌が強引に入ってきて口内をしゃぶり回す。
隙間なく身体を密着させられて、逃げられない。その間も奴は腰をゆらし、へその浅い穴に亀頭を押しつけてくる。
「ッ！　〜〜ッ！」
おおいかぶさる巨体を蹴り上げるが、うまくいかない。
逆に押さえ込まれる始末だ。
ずちゅ♡♡ぬちゅ♡♡ぬちちっ♡
いかがわしい音がさっきからずっと下腹から響いている。
（へそがヌルヌルして気持ちわるい……ッ）
なんとか引きはがそうとするも、顔はガッチリと固定されている。振

りほどこうとすればするほど、唇を深く吸われる。
（しつ、こいっ。こいつ、息が……できな……ッ♡）
唾液を喉に流し込まれた。まるで体内から侵食していくかのように何度も喉にぬりたくられる。
「ッ♡　っ♡」
「あ～。かわいい声出せんじゃねーの」
半目で何をばかばかしいことを。
デマヴァントの額に手をかけて引きはがそうとするが、その度に勃起した亀頭をへそに押しつけられて力をなくす。
息が上がるほど舌をしゃぶられ、しまいには頬をでろりとなめられた。
「ッ！」
とっさに顔をそむけた。

「傷つくなあ。そういう反応。オレの心臓よわよわなのに」
（……どこがだ。十年前も単騎で突撃してきただろう！）
貴様こそ心臓に毛が生えている部類だろうに。
反論すればまた唇を奪われる。そんなのはもうごめんだ。
固く口を閉じれば、少し間があった。
こいつは一秒だって黙っていられない五歳児みたいな男だ。
ふしぎに思い、横目で見ると目がかち合った。
にい、とデマヴァントが唇をつり上げる。
「なぁんてな。お前が寝てるあいだ、隅々まで身体調べたからどこが弱いかなんてとっくに知ってるんだよな。オレは」
「……はっ……」
笑い飛ばそうとしたが、うまくいかなかった。

奴にのしかかられてからずっと、翻弄されっぱなしだ。
ディープキスも身体の密着具合も、へそにくっつけられた奴のモノもどこか手馴れた感じがする。
まさか、いや本当に……？
「オレの宿敵は耳が弱いだろ」
耳たぶをなめられる。舌のかわす水音が近すぎて、耳に唾液が入ってきそうだ。こわい。
肩をそびやかすが、奴は離れない。
「うなじも弱いんだっけな」
つう、と乾いた太い指先でそうっと肌をなぞられる。
上から下へ、唾液を足されて、今度は濡れた指で下から上へ。
黒い後(おく)れ毛をつままれ、スンスンと匂いをかがれた。

「やめ……っ」
「ほうら、お洋服ぬぎぬぎしましょうね」
赤ちゃんに言い聞かせる調子で今度は上着のボタンを上から一つずつ外されていく。
ゆっくりと白い胸元があらわになり、乳首を暴かれる。
「おっ。陥没乳首ちゃん見っけ」
両胸の乳首を両指でこねられる。
人と違う胸は長年、劣等感のかたまりであった。
それを宿敵デマヴァントに知られていたなど――！
恥ずかしすぎて死にたい。
「こういう乳首は顔見せてやらないといけないよなぁ」
「待て――」

ズチュルルル♡♡
下品な音を立てて両胸を交互に吸われる。やわらかい乳輪をしつこく指の腹でこねくり回される。吸いやすくする為につままれ、陥没した穴を舌先でほじくり返される。そうすると下腹のあたりがムズムズしてくる。
（やっ♡　これ、舐められるの、だめ……っ）
身体が自然とずり上がる。
「逃げんなよ」
「やぁ♡　はなせ……ぇ」
腰をつかまれ強引に引きずり戻される。
ちゅっぱ♡ちゅっぱ♡ヂュルルルル♡♡
胸をしゃぶる音がさらに激しくなった。デマヴァントの金茶色の蓬髪

が鎖骨や喉仏をくすぐる。それなりに盛り上がった胸板を女の胸のように揉まれていじられる。
「もぉ、やめ……ろ……ォ！」
ちゅぽん♡♡
一際高い音が響くと同時にデマヴァントがようやく顔を胸からどかした。
むわりと白い湯気がたつなかで、薄紅色の乳首がぷっくりと立ち上がっていた。もちろん奴の唾液まみれで。
その艶かしい光景に、下半身がずくんと反応してしまう。
（駄目だ。こんなくっついた状態で――っ♡）
デマヴァントの身体を引きはがそうとするが、逆に足を絡め取られる。
ぴゅぅぅう♡

イった。軽イキしてしまった。密着したこの体勢では音や熱までは隠せない。
「へぇ。起きてる時に陥没乳首を出させると即イキしちゃうのか。オレの宿敵は」
「ちがう。これは今、貴様が……勝手に……っ」
「うん？　じゃあこのへにゃってるおちんちんは何かな？」
むんずと布ごしに竿をつかまれる。
「オレの唾液だけじゃねえよな。この湿りけは」
「ゃ、ァ♡　かってにさわるな……ァ♡」
「どういう形してるのか見せてもらわないと、駄目だよな。コレは」
デマヴァントが身体をずらし、両足を持ち上げた。
あお向けの状態で足を閉じようとするが、この男の握力の前では無力

だった。
「や……ひらくな……ァ……ッ」
持ち上げられた両足が奴の両肩に担ぎあげられる。腰が浮きあがり、奴の手がベルトにかかった。
「我が宿敵のおちんちんはどんなサイズかなぁ」
カチャカチャと音を立ててベルトを引き抜かれ、ズボンに手をかけられる。
ゆっくりと焦らすようにボタンを外す。
「お。オレの下着やっぱでかかったか。すかすかじゃん」
「お前の……下着……？」
確かにいま着ている服は王宮で着ていた一張羅ではなく、ピリカ特有の仕立てだったから借り物だと思っていた。

だがデマヴァントの軍団で余っていた服だと思いこんでいたから、これが軍団長自身の服とは予想もしなかった。
いや待て、奴の下着を履かされているということは――
ハッと顔を上げると、デマヴァントはイタズラがみごと成功した悪ガキのように笑った。
「お前の可愛いおちんちん、もう見てるから別に恥ずかしがることないぜ」
「貴様ぁッ！」
激昂して手を伸ばすも、もう遅い。
ずるん、と下着を引きずり下ろされ、軽イキした竿があらわになった。
しんなりした竿を持ち上げられる。
「オレの手に丁度いいくらいに収まるんだよ。可愛いよな。お前のちん

ちん」
「ッ、今すぐその手をどかせ！」
担ぎあげられた足のかかとで背中を打つ。
だが、ビクともしない。
「にぎにぎされると気持ちイイよな？」
にちゅ♡にちゅ♡
太い指で笠をほじくり返されると堪らなく、イイ。
だがそれをコイツに悟られたくはなかった。
「ッ♡　っ♡　だまれ、この……ヘタクソ」
「お。そういうこと言っちゃう。じゃあこれはちょっとお仕置きしてやらないと」
（……お仕置き？）

見当もつかず、小首を傾げる。
とデマヴァントがベッド脇の棚から透明な液体の入った瓶を取り出した。
栓を抜き、手のひらにじゃぶじゃぶと液体をかける。
指先にまでべっとりと液体をつけたあと、おもむろにスヴェンの竿を暖かい両手ですっぽり包み込んだ。
「イイ声聞かせろよ」
「え……」
ソレは突然始まった。
ちゅっぽ♡ちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽ♡♡ぶちゅちゅぅぅう♡♡
竿が十本の指に際限なく責めあげられる。
笠をほじくられ、竿のシワもこねくり返され、亀頭を手のひらでさす

られる。精嚢も揉みしだかれる。
竿の根元から尿道の先っぽまで余すことなく奴の手で快楽に転げ回された。
「ゃァァァアアァ♡♡♡」
「起きてるとそんな声だすのか。いいね。いいねぇ」
ぷ、しゃぁぁぁあ♡♡
おもらしをするみたいに透明な液体が噴水のようにわき出した。
当然奴からは何もかも丸見えだ。
「やァ……見るな……見るな……ァァアッ♡」
「おぅおぅ。おちんちんが潮吹きしてて可愛いねぇ。オレの宿敵は」
「だ……れが……かわいい、だ……！　ァ♡　……ぅンんッ♡♡」
にらもうとするが、うまくいかない。快楽の波涛が押し寄せて、思考も

理性も何もかも吹き飛ばしてしまう。
精液かおしっこかも分からない液体が胸や頬を濡らす。
「ただコレだけで満足されちゃオレが困るからな」
ようやっとデマヴァントの手が離れていく。
ほっとしたのもつかの間、濡れた指が今度は尻の割れ目にふれた。
「……どこを、さわって……」
その先は不浄の穴だ。他人がさわるなどあってはならない。
「どこってそりゃ、これからオレがお前を抱いてくんだからなにごとも準備は必要だろう」
つぷう♡
太い指がゆっくりと窄まりのナカに入ってくる。
粘膜のかたちを探るように指の腹が上下左右と動きまわる。初めての

感触に腰が逃げを打つ。
「やっぱキツいなぁ。今日は広げるだけにしとくか」
これ以上入ってこないと分かり、安堵する。
だがその反応はデマヴァントに見透かされていた。
にい、と奴がまたイヤな笑みをたたえる。
「指だけでもきちんとイかせてやるからな」
いらない。絶対いらない。
さっきみたいなのは、あの一回で十分だ。
首がもげるほど左右に振って拒否したが、ここで聞く耳を持つ男なら
こんな事態になっていない。
「安心しろ。気持ちイイから」
気持ちよすぎるから嫌なんだ。

枕元へ後退しようとするが、両足を担ぎなおされて引きずり戻される。
「ゃ……」
「前立腺ちょ〜っとコリコリするだけだから」
「ぜんりつせん……？」
初めて聞く単語に戸惑う。
その隙をついて、奴の指が奥へねじりこまれた。ゆっくりと奴の手首が返される。その動きになぜか悪寒が走った。
なにか良くないことが起きる。また理性も思考もなぎ倒すような何かが襲いかかってくる。そんな気がした。
「それじゃあ、たくさん啼いてくれよ」
言うなり指の動きが変わった。
くにゅ♡くにゅ♡くにゅ♡くにゅくにゅ♡くちちっ♡

指の腹でコリコリと固い部分をこねられた瞬間、萎えた竿が再び力を取り戻した。

だがそれは他人の指に強制させられた勃起で、自分の身体が自分のものではなくなる感覚だった。背筋が粟(あわ)だつ。

結果、喉から甲高い悲鳴が漏れた。

「ァ、ァァ♡ あひっ！ それダメっ♡ だめ、だからァァアアア♡♡」

腰が浮き、奴に自分の股間を見せつけるような体勢になってしまう。

（いやっ。下がれ！ 下がれというのに……！）

身体を落ち着かせようとするが、言うことを聞いてくれない。

「このまま前立腺コネコネからの潮吹き覚えちゃおうな♡」

嫌だ。シたくない。

だがデマヴァントの指は的確に弱点をついてくる。粘膜の奥に隠され

た小さな豆を指の腹で丹念にいじくりまわし、こねくり返す。
このまま行けば負ける。どんな形であれこの男に負けるのは己の意地が許さなかった。
屈辱と羞恥に乱れた心を叱咤する。
この男に負けっぱなしは自分が許さない。なにかひと言でもいい。反撃の狼煙（のろし）になる言葉が必要だった。
「この……ど下手くそ」
デマヴァントの目がすう、と細められた。
「お前のそういうとこ、ホント好きだぜ」
両足を下ろされた。
あぐらをかいたデマヴァントの膝の上に乗せられる。それも向かい合う形で。

もちろん前立腺はいじくり回されたまま――
「いゃだっ！　離れ……、……ひっ！」
「おら見ろよ。今のでこんなに固くなっちまったぞ。オレのチンコ」
ぬちゅ♡
スヴェンの竿を覆い隠すようにデマヴァントの太竿が下腹にくっつく。
「責任とってもらわないと、なあ？」
ちゅぽん♡
尻穴から指が引き抜かれる。
腰を持ち上げられ尻の割れ目に奴の竿を挟みこまされた。
「ケツコキってやつだ」
言うなり腰をすべり降ろされた。尻肉のあいだに奴の巨根が挟まる。
ねっとりとした我慢汁が尻たぶにくっつく。

「気持ちいいだろ？　これ以上ど下手くそなんて言わせねえからな」
「ッ、待っ――」
猛攻が始まった。
ずちゅ♡ずちゅずちゅずちゅ！
尻の形が変わるほどキツく押さえこまれたまま、何度も腰を揺さぶられる。時おりデマヴァントの亀頭が尻穴をかすめるせいで、入ってくるんじゃないかとヒヤヒヤする。
「いいケツしてるよな。女みたいに丸みがあって、白くて、そのくせ重みがある」
たぷたぷと尻を持ち上げられて恥ずかしい。
しかも前立腺をいじられて勃起させられた竿が奴の割れた腹にくっついていた。

「……少し、だま、れ……ッ」
「うーん？　オレの腹筋におちんちんこすってもらえて気持ちイイってか？」
こいつ、知ってて――！
「でもま、男ならコッチの方が気持ちイイよな？」
瓶に残っていた液体を竿にかけられる。と、デマヴァントが口のなかで短くささやいた。液体が意思を持った生きもののように動き始めた。
「貴様、何を……っ」
「いいだろ。コイツ、原料がスライムなもんで、ちょっと魔力注いでやると言うこと聞いてくれるんだよ。たとえばお前の尿道をズブズブに犯してやれとか」
「え……」

視線を下ろすとまさに透明な液体が尿道にくっつくところだった。
くちゅ♡ぶちゅちゅぅぅう♡♡
激しい音をたてて、尿道のナカに入ってくる。細い管を押し広げ奥へ奥へと入りこむ。そのまま精子の原液を飲みこもうとする。
「……ゃ♡　いやァァァアア♡」
「うっひょ。イイ声。それじゃイキますか」
「ゃ……だめ……動かすな……ァ」
いま少しでも身体を揺らされたら、痴態をさらすのは目に見えている。
デマヴァントの太い猪首に腕をからめて懇願する。
「だ〜め」
ぺちん、と尻を叩かれた。その衝撃だけでイク。
ゴクゴクとできたばかりの精液をスライムに飲まれ、さらにもう一滴

と促された。
「――やっ♡　無理っ♡　搾り取らないで……あひっ！」
「たくさん出していいからな～。オレもお前の尻でイかせてもらう」
ぬ――ちゅ♡どちゅどちゅどちゅ♡♡
尻をつかまれ、身体を揺さぶられる度にイク。その都度スライムに精子をしゃぶり尽くされ、またイク。
無間地獄（むげんじごく）のような責め苦に、気づけばデマヴァントの身体にしなだれかかっていた。
「やだ……やっ♡　もぉ、イキたくな……ッ♡」
「オレがイクまでは我慢しろよ。オレの宿敵だろ？」
「こんなの、むり……ッ♡　がまんできな――ッ♡」
もうなりふりかまっていられなかった。